

【海外株式市場・経済指標】 ～ユーロ圏CPI、シカゴPMIともにサプライズ～

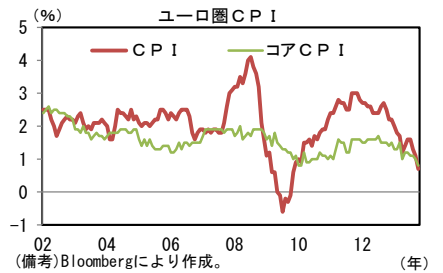
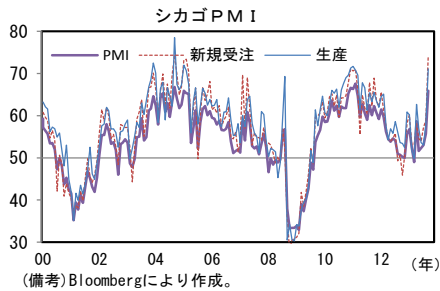
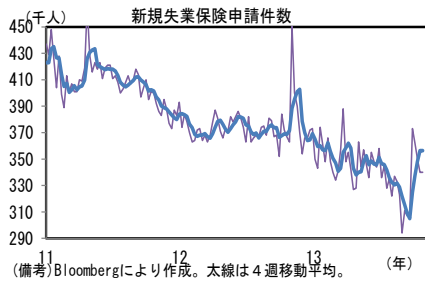
31日の米国株式市場、NYダウ平均株価は続落。前日比▲73.01^{ドル}の15545.75^{ドル}で取引を終了。このところのラリーの反動もあり、シカゴPMIの改善も一段と買い上がるには材料不足。

新規失業保険申請件数は34.0万件と前週(35.0万件)から減少。今回発表分にシステム更新の影響は残存していないとのこと。また政府機関閉鎖の影響もごく僅かだろう。完全に実勢を反映していると仮定すると、ノイズが入る前の水準を2-3万件上回っている。単月の振れが大きいのが厄介だが雇用統計NFPの減速が示すように、労働市場が“本当に”鈍化している可能性がある。

10月シカゴPMIはサプライズ。PMIは65.9と前月(55.7)から大幅改善(市場予想:55.0)。内訳をみると、生産(58.0→71.1)と新規受注(58.9→74.3)が大幅改善したほか、雇用(53.2→57.7)も強かった。受注残(46.7→61.0)も積み上がっており、さながら製造業活動が活況を呈していたかのような数字だ。ただ、NY連銀やフィリー指数の低下を踏まえると、額面通りには受け止めづらい。

10月ユーロ圏CPIはサプライズ。前年比+0.7%と前月(+1.1%)から急減速、コアでも同+0.8%と前月(+1.0%)から減速しており、デフレを懸念させる内容。このまま下落基調が続けば、ECBが足もとのユーロ高圧力緩和とデフレ警戒のため、早ければ12月にも追加緩和に踏み切る可能性がある。

9月ユーロ圏失業率は12.2%と過去最悪を更新。8月も0.2ppt改定され12.2%となった。



【外国為替相場・債券市場】 ～伏兵：ユーロ圏CPIとシカゴPMI～

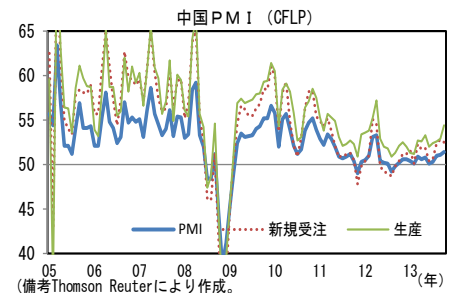
31日の海外時間はG10通貨に対してEURが全面安となる一方、USDが強かった。USD/JPYは米国時間早朝まで下落基調を辿ったが、シカゴPMIを受けて下げ止まった。G10通貨ではEURの弱さが目立った。EUR/USDはCPIの下方サプライズと失業率上昇がECBの利下げ断行を意識させるなか、シカゴPMIを受けて一段と下落。

米10年金利は+1.6bpの2.55%。欧州時間から米国時間早朝までは低下基調を辿り、一時2.5%割れとなったがシカゴPMIを受けて急上昇。独10年金利は▲1.4bpの1.67%。独GfK消費者信頼感、小売売上高が共に軟化したことに加え、CPIがサプライズとなった。伊・西10年金利も大幅低下し、それぞれ4.13% (▲5.9bp)、4.03% (▲3.1bp)。

【国内株式市場・経済指標】 ～中国PMIは合格点～

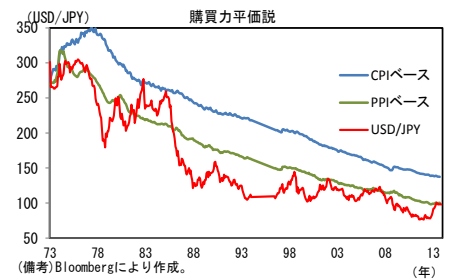
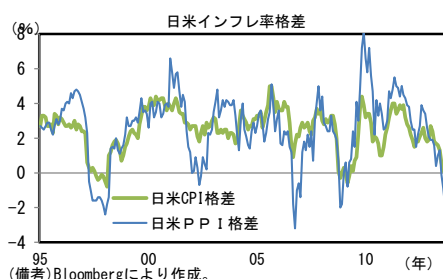
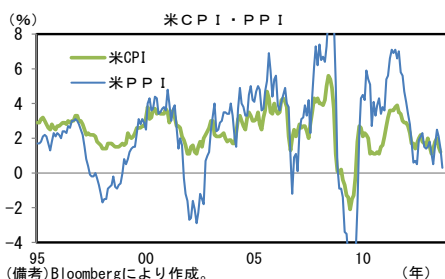
1日の東京株式市場、日経平均株価は続落。前日比▲126.37円の14201.37円で取引を終了。米国株の軟調な地合を引き継いだことに加え、一部銘柄の決算が失望されたこともあり、売りが膨らんだ。

10月中国製造業PMI (CFLP) は51.4と前月 (51.1) から改善 (市場予想：51.2)。内訳をみると、生産 (52.9→54.4) が高い伸びを示したほか、新規受注 (52.8→52.5) と新規輸出受注 (50.7→50.4) も水準を維持。同時に在庫 (47.4→45.6) は減少しており、バランスの良い成長を続けている。この動きはHSBC・Markit版PMIと概ね整合的で、幅広い企業規模で業況が改善している様子が見て取れる。



【注目点】 ～米欧のデスインフレ VS 日本のデフレ脱却～

今週、米・欧でサプライズとなったのは物価統計だ。米PPIとCPIは前年比でそれぞれ+0.3%、+1.2%まで鈍化し、昨日はユーロ圏CPIが話題となった。このように米・欧でデスインフレ基調が強まるなか、日本の物価は上向き基調で対症的な動きとなっている。既に日米PPI格差は逆転(日>米)しており、PPPに基づけば、円安圧力が作用している。もともと、米・欧のデスインフレ基調は、短期的には追加緩和期待を通じてUSD、EUR安を促す可能性があるため、即座に円安が進む可能性は低いだろう。ただ、それでもPPPは世界で最もポピュラーな為替理論だ。今後もインフレ率格差が縮小すれば、少なくともJPYに染み付いた「デフレ通貨」としての印象は払拭されるだろう。



【予想レンジ (5営業日以内)】

NYダウ平均株価 15300~15700ドル 日経平均株価 14000~14500円 ドル円 97.00~99.00円